

## 台湾先住民族社会の戦後過程

森 田 健 嗣 \*

### The Decolonization Process of Indigenous Taiwanese in Postwar Taiwan

MORITA Kenji\*

This paper discusses the decolonization process of Taiwanese aborigines. China, which governed Taiwan after World War II, was unaware of the existence of Taiwanese aborigines. Thus, they merely acted on the understanding that the people of the plains in Taiwan welcomed the government officials of the mother country. While a few aborigines had started a movement for decolonization after the 228 Incident of 1947, the movement was quickly suppressed. The following then happened in the 1950s. The administrator excluded all of the Chinese Communist Party, which was considered to be an “enemy.” Furthermore, unitary policies evolved in Taiwan, such as national language education and the policy to make the mountains like the plains. Additionally, the aborigines’ traditional religion began to be replaced by Christianity. Taiwanese aborigines were minorities, and the Han race was predominant in Taiwan. Because of these religious and policy-related changes, it became difficult to maintain and pass on the aborigines’ original culture.

#### 1. は じ め に

本稿は台湾先住民族社会の戦後過程を論じる。台湾平野部に住む人々（主として漢族）は、戦後すぐの頃中国本土から到来した「祖国」を歓迎したことはよく知られている。一光景として国語（日本語）を拭い捨て新たな国語（中国語）を積極的に学んだ点があげられる [森田 2014a]。だが來台した人々に幻滅し、ついには二・二八事件に至ったことはこれまでも度々指摘されている [何 2011: 208]。

ところが主として台湾山間部に居住する先住民族が上の態度を示すことはあまりなかった。黄 [2012: 58] は先住民族には台湾平野部に住むホーロー人、客家人がもつ「祖国」意識の対象は存在せず、彼らにとり故郷とは生まれ育った台湾のみであり、彼らは日本以外の国家に従属したこともなく、帰属意識をもち得るような対象とは、日本のみだと指摘する。ここから先住民族にとり台湾を再度統治した「中国」という国家は全くの未知の存在であり、ただ傍観の

---

\* 東京大学大学院総合文化研究科, Graduate School of Arts and Sciences, The University of Tokyo  
2014年9月29日受付, 2014年12月3日受理

姿勢を示していた様子がひとまぜうかがえる。

ではこのような国家認識をもつ先住民族の社会は、戦後台湾のうねりのなかでどのような変化を遂げていったのか、このような問いに答えうる研究はまだ少ないといえる。戦後台湾の先住民族について、呉 [2008a, 2008b, 2009] の先住民族社会的リーダー階層に関する研究、藤井 [2001]、陳 [2008]、松岡 [2012] の山地行政史研究、森田 [2013a, 2013b] の言語政策研究、林 [2007] の対先住民族法令の研究などが発表されている。他に山地行政の当事者（台湾省政府民政庁山地科）の記録や口述記録として郭 [1975]、林 [2009] などがある。だが、戦後過程の全体を見渡した研究はまだ発表されていない。

戦後になり先住民族社会が大きく変貌を遂げるのは、山地平地化の展開に代表される 1950 年代以後である。この大きな変化の前提を理解すべく、本稿ではまず第 2 節において、戦後初期（1945-49）の先住民族社会に関する先行研究をレビューしつつ、近年公刊された資料等を引用し、当時為政者は山地統治にあまり積極的ではなかった事実を示す。そして第 3 節で扱う 1950 年代以後は、戦後初期と異なり為政者が強力に人心を掌握し統治する方向へと転換するが、この際、上からの山地平地化、国語教育、そして為政者によるキリスト教布教の利用、という事例を掲げ、政策のみならず下からの視点（受け手）の双方に目配りするための未公刊文書等の関連史資料を取り上げつつ、上に掲げた課題に答えていく。

## 2. 戦後初期の先住民族社会

### 2.1 来台した為政者の対先住民族政策

戦後初期の先住民族への視座や施策、具体的には如何にして人々に日本統治時代の遺制を破棄させ、かつ戦後の政権の権威をもたらそうとしたかをみる。まず、「高山族施政研究会議」（台湾省行政長官公署、1946 年 1 月 11 日）によると、戦後台湾に到来した為政者は、5 年計画で日本統治時代に定められた各種の圧迫的政策をすべて取り払い、先住民族に平等の待遇を享受させる、という議論があり、また「高山族施政研究会討論大綱」では、先住民族の各水準をいかに高めるかが課題とされていた。つまり、先住民族に旧宗主国から受けた事柄を破棄させる方向性が示されている [森田 2013a: 80-81]。

例として日本名から漢族式の姓へ「回復」するよう求めたことがあげられる。台湾省行政長官公署は 1945 年 12 月 9 日「台湾省人民回復原有姓名辦法」（台湾省人民旧姓名回復規則）を公布し、先住民族については第四条の規定「高山族人民は本辦法第二条各項にあるように、本辦法の規定により元々の姓名を回復するよう願いでることとし、もし元の姓名を回復できない、または元の姓名が適切でない場合は、中国姓名を参照しつつ自ら姓名を定めること」とされ、日本式姓名を使っているかどうかにかかわらず、すべて漢族式の姓に改める、元の姓名を使ってはならないとされた [藤井 2001: 157]。

タオ族の場合、郷役所職員や学校の教員が漢族式の姓名を決めたという [野林 2003: 596-597]。またツォウ族では、「高砂族」の最初の漢字を姓とした者が多かったという [高 2013b: 340]。ただ、人々は日本統治時代の旧姓名に使い慣れており、一体どんな名前に改めたかさえ不明瞭であるなか、もし普通選挙を実施すれば混乱をきたすという危惧がみられた。そこで候補者の旧姓名に日本語の五十音を振った投票用紙が印刷されたこともあった [台湾省諮議会 2001: 94]。

では為政者は日本的なるものを破棄させた後、どのようにして政府寄りの先住民族社会に変えていったのか。まず旧来の頭目等には族長の意味しかもたせず、地域の行政事務は郷長や村幹事があつた [洪 1971: 44]。一例を示すと、ツォウ族の高一生<sup>1)</sup>は、三民主義青年団に加入し、阿里山地区の治安の維持に努め、呉鳳郷（現、嘉義県阿里山郷）の初代郷長になり、経済作物の栽培や造林の推進や、灌漑や用水路の補修、そして水稻の収穫量の増産をはかった [高 2013b: 340-341]。しかも、当時の一般的な平野部の都市のように、職員のほとんどが外省人だった状況とは異なり、郷長以下の職員は地元の先住民族で占められていた [高 2013a: 273]。

上の例は戦後の政権は先住民族を吸収しようにも、直ちに官吏が派遣されるまでの空白があったため可能だったとされる [中生 2003: 50]。空白ゆえに為政者は実のところ先住民族社会全体の掌握が困難だった。湯守仁<sup>2)</sup>が述べるように、接収官員らは平地で地位や利権を奪い合い、利権なき山地を捨てて顧みず、山の派出所、学校、道路などは徐々に荒廃し、真空状態におかれたと表現している [何 2008: 833-834]。

しかも山を治める機構組織が朝令暮改の如く短期間で変わり、山地従事者は安定して職務にあたれず、また山の人は命令を聞く拠り所すらなかった [何 2008: 835-836]。そして林瑞昌<sup>3)</sup>の証言にあるように、山の生活は日本統治時代の水準を保てず生活は困窮し暮らしも墮落したとする [紀念台湾省第一届原住民省議員林公瑞昌一樂信・瓦旦一銅像落成揭幕典礼委員会 1993: 33-34]。混沌とする山地行政の一例として国語（中国語）教育政策をみると、

- 1) 高一生（矢多一生、ウォグ・ヤタウユガナ）（1908-1954）。阿里山のタパン蕃童教育所在学中に父が曾文溪で事故死した後、当時の嘉義郡守に引き取られ、卒業後嘉義尋常小学校に転入し、台南師範学校に進み、1930年卒業。帰郷し巡査に任じられ蕃童教育所教師も務め、当局の「生活改善」に協力し、水稻技術の普及、杉や竹の栽培、家族の死後家のなかに埋葬する習慣の廃止、青年会の組織などに奔走した。1945年8月の日本敗戦の報が伝わると故郷の治安維持に努め、翌年呉鳳郷が設置されると郷長に任命された。1952年に逮捕され、1954年に処刑された [浦 2005]。
- 2) 湯守仁。1924年嘉義阿里山達邦村生まれ。楽野村教育所卒。台南第一青年学校卒。1943年日本陸軍予備幹部候補生訓練団歩兵科。1945年ソ連の満州侵攻後、シベリアへ送られたのち台湾へ戻る。1947年楽野村村長。二・二八事件ではツォウ族青年を引き連れ水上飛行場などを攻める。台南県参議員、台南県政府山地行政組長など。1948年に陳顯富と知り合い、台北市で簡吉らと接触し、匪党の山地活動問題を議論する。林瑞昌と「高砂族自治委員会」を組織するよう指示する。1949年民政庁山地指導員、台湾省警務処山地警務室兼任科員。楽野村食品工場を開設（共産党員林白の資金提供）。1950年蔡孝乾が主宰する会議に参加。1952年逮捕、1954年処刑 [何 2008: 1047-1049]。

引き揚げた日本人警官兼教員の補充が困難で、児童もなかなか出席しなかったという [森田 2013a: 82-87]。しかも不完全なカリキュラムのもと、日本語等を併用する授業形態がとられたが、教員は授業をしながら蓄音機で標準的な北京語を学んでいた [高 2013a: 272]。

## 2.2 先住民族の新たな「祖国」への対応

では山の人々は新たに到来した「祖国」をどう受け止めたのか。中村平 [2007: 154-155] の調査によれば、タイヤル族の地域では終戦を知った日本人が突然鉄砲を撃つなど、動揺した様子がみられた。さらに川路 [2008: 136-137] のインタビュー調査によれば、「上からやかましく言う」ことがあった一部の日本人警察に手をあげようとした先住民族もいたとある。しかし相対的に先住民族の対応は平野部と異なった。山からの引揚者による記録 [西盛 1982; 宮村 1982] にあるように、平地の人々が日本人に危害を加えるという話が多方面で聞かれたため、引揚者の援助を申し出る先住民族すらいた。

このような平地と山地の人々との間に横たわる行動の差異はなぜ生じたのか。それは冒頭で示した黄 [2012] の研究に加え、上述の湯守仁の記録や、ワタン・タングへのインタビュー記録から一端を垣間みることができる。湯の証言によれば、山では中国文化というものをみいだせず、祖国とは白い紙の如く全く理解し難い未知の事物であり、平地の人のように喜び勇んで祖国の接収官員を歓迎することはなかったと述べる。それどころか、当時人々は漠然とした不安や期待を抱いていたのだという [何 2008: 833-834]。またワタン・タングは、新政権とは漢族のいわゆる「祖国」であるという以外、全く何も分からず、伴ってきたものとは異なる言語、生活習慣、法律道徳であり、タイヤル族の挫折感は非常に深かったとする。さらに山にはパニック、失望、不満が訪れ、人々は新政権に傍観の態度をとったという [タング 1999: 57]。こうして先住民族は平野部の漢族が抱くような、中国本土からの來台した者への特別な感情を、特段有していなかったことが分かる。

しかも、日本人と入れ替わるように先住民族出身の元日本兵が台湾へ帰還してきたが、黄 [2012: 58] によれば、彼らが到着した台湾の港には、かつての敵国である接収部隊が駐留し、

- 3) 林瑞昌 (ロシン・ワタン, 日野三郎) (1899-1954)。1899年8月, 台北三峡・大豹生まれ。タイヤル族。1921年3月台湾総督府医学専門学校卒業。1921年4月から1945年8月まで「公医」。1945年4月, 台湾総督府評議員。1945年10月, 尖石郷衛生所所長。1946年1月初代尖石郷郷長兼尖石郷衛生所所長。1946年3月, 台湾省山地流動治療隊隊長。1946年12月, 角板郷衛生所所長。二・二八事件当時, 林は郷長代理の職にあり事件の後当局は彼を「時局の安定に功績をもった」として表彰した。1947年6月, ロシンは政府当局に「三峡大豹社の祖先の地」の返還を求め陳情した。1948年, 林は省政府顧問の職を受けた。1949年11月, 補欠選挙により第一期の省参議員となり, 1951年11月には第一期の省議員となった。林は議会政治において, 先住民族の権益を取り戻すよう主張し始めた。彼は, 先住民族の民意代表数の増加, 山地行政管理局の設置, 山地行政の一元化, 先住民族の人材育成, 山地農村生活の援助と復興などを議会で提案し, 先住民族の政治, 行政, 教育, 生活などの基本的権益の保護を主張した。しかし1950年代初頭, 国民党政権が台湾に撤退すると政局は極めて混乱し, 危険な状態にあり, 1952年11月, 当局は「高山族匪諜 (共産党スパイ) 案」の名目により林を逮捕し投獄し, 1954年4月処刑 [紀念台湾省第一届原住民省議員林公瑞昌一葉信・瓦旦—銅像落成揭幕典禮委員會 1993: 2; 范 2008]。

「国家」の内実がすっかり変わったことに気付かされ、ホーロー人や客家人のような「原郷」イメージを中華民国に重ねることのなかった先住民族にとりこの衝撃は平地の人々よりはるかに大きかったとする。つまり加藤 [1979: 137] の記録にあるように、国家が入替わり、新たな祖国の側からすれば帰還した者は歓迎せざる者、また帰還した者からすれば新たな祖国は掴みどころのない存在となったことが確認できる。

しかし高一生の証言や孫大川による記録を参照することで、彼らの真意の全体像が把握可能となる。高一生は「台湾人はコウモリにそっくりではないか。オランダ人がやってくると、オランダ人になった。明の鄭成功がやってくると、明鄭の人間になった。清国人がやってくると、清国人になった。日本人がやってくると日本人になった。いまはまた中国人が変わったのだ」[高 2013a: 266] と語っていた。さらに孫 [1991: 153] の調査では、先住民族は日本に僅かな感情はあるものの脆く、感情はすぐさま新たな統治者へと転移し、またある高齢の先住民族からは、誰が来ようと私たちは他の文化や祖国への一体感はなく、すべて同じく外来政権だという声が返ってきたという。つまり、国家意識を中国または日本におくかという二者択一でもなく、さらに平野部の漢族が示す歓迎の姿勢どころか、またもや他者に統治されるという心情の吐露が分かるのである。

先住民族らが求める自律的な空間がないことはなかった。若林 [2008b: 299-300] は、台湾総督府が要請した「先覚者」だった先住民族のエリート（タイヤル族のロシン・ワタンやツォウ族のウォグ・ヤタウユガナ等）が、戦後初期すでに先住民族としてのアイデンティティと「土地」と「自治」への渴望を口にし、台湾先住民族も「第一民族」としての自律的な脱植民地化の胎動があった点に触れている。

まず高一生についていえば、1947年3月17日、即ち二・二八事件<sup>4)</sup>直後で国民党政権がすでに鎮圧と清郷（地方や農村における「反政府的」人士の掃討）を展開していた時期に、「矢多一生」すなわち高一生と「安井猛」が共同で署名し、台湾各地の先住民族の社会的リーダー階層を霧社に集め会合を開き、先住民族の自治について議論するという「案内状」がある [中央研究院近代史研究所 1993: 284-287]。「案内状」の主文の部分は、主に予定される先住民族の自治会議を開く目的の簡潔な説明と、会議の時間・場所の通知からなる。彼らの自治思想と

4) なお、先住民族らが積極的に二・二八事件に関与することはあまりみられなかった。例を示すと、事件当時、林瑞昌は郷長代理の職にあり、事件後、当局は彼を「時局の安定に功績をもたらした」として表彰した [紀念台湾省第一屆原住民省議員林公瑞昌一樂信・瓦旦一銅像落成揭幕典禮委員會 1993: 2]。阿里山でも嘉義の飛行場にあった武器倉庫を、ツォウ族の青年が中心となって襲撃する事件が発生した。高一生は、嘉義の飛行場の攻撃には否定的で、武器を確保した後は、いち早く阿里山へ引き揚げることを主張し、最終的に軍司令部の裁判でも、この事件では罪に問われなかった [中生 2003: 50]。当時の国防部部长（国防を所管する省庁の長）白祥禧は、事件後先住民族と警察官に対し、ラジオを通じ次のように賞賛の言葉を送っている。「…各高山族同胞は暴動への参加を煽り立てず、また南志信、馬志禮など多くの同胞は、地元県市政府の保全や秩序維持に協力した。この国家を愛護し、法や規律を遵守する精神は、実に感服するに値し、褒め称える。…」[『中華日報』1947年3月28日, 2頁] [林元輝 2011: 1355-1357]。

制度への願望が詳述されているのは、「案内状」の「附記」の部分である。

文章の後ろには、「一案」という先住民族自治制度の構想案がある。彼らは「高山自治区」と称し、警察局長兼区長をおき、県長（高山）は台湾省政府の省長に隷属する、としている。また区長の下には、警察課、産業課、教育課、建設課、財政課、衛生課を配している [中央研究院近代史研究所 1993: 287]。呉 [2008a] はこの資料について、ただの呼びかけや決意表明、願望を描いているだけだとする。だが近代的な政治概念を用いて、正面から台湾先住民族の主体意識をはっきりと表明している初の資料だと分析している。

ところが中村ふじゑが高一生と親交があった人物に、この資料のコピーをたずさえて訪ねたところ、案内状を一目見て「知っています。覚えていますよ。会議は開かれませんでした」と答えが返ってきた。理由は、案内状の配達をしていた人が逮捕され、会議は当局によって禁止されたからだという [中村ふじゑ 2000: 191]。こうして高一生らによる脱植民地化の胎動は胎動のままに終わってしまった。

林瑞昌についていえば、1947年6月8日、ロシン・ワタンが台湾省政府に提出した「台北県海山区三峽鎮大豹原社復帰陳情書」がある [台北県海山区三峽鎮大豹原社復帰陳情書 2008]。呉 [2008a: 60-61] にそって資料を説明すると、「陳情書」の冒頭で「元来我々台湾族（高山族）ハ台湾ノ原住民族デアリ」とあり、先住民族の間から最も早くに出された「原住民族」(aboriginal people) 宣告だとする。しかも当時省政府委員のプユマ族リーダー南志信も同年6月、省政府へ「高山族」を「台湾族」に改めるよう建議している。2人の重要な先住民族リーダーがほぼ同時に「台湾族」へと名を正すことを求めた事実は、当時先住民族エリートの間である種の共通認識を得ていたと指摘している。

では林瑞昌はなぜこのような陳情書を出すに至ったのか。林らにとり日本という過去の「母国」が他者となり、先住民族とは一切関わりのなかった前の敵国「中華民國」が、「祖国」となったが、「陳情書」の最後の部分 [台北県海山区三峽鎮大豹原社復帰陳情書 2008: 43]<sup>5)</sup> では、新たな「祖国」に対し日本統治を脱したことにひとまず感謝の意を示しつつ、自らの主体性を述べようとしていた。

ところが高一生、林瑞昌が声を発したとき、国共内戦が激化し中国大陸における国民党の存立が危ぶまれていた。松田 [2000: 88] の阿里山のツォウ族へのライフヒストリーによれば、1948、49年に中国東北地方の日本語もできる流亡学生が国民党特務として、代用教員の形で阿里山にきて、どのような人間が隠れ、どのような武器が隠されているかを調査していた。そ

5) 「幸ニ我が国八年間ノ抗戦ニヨリ日本ガ降伏シ台湾ガ光復シ三民主義ニ則リ民族平等ノ惠政ニ浴シマシタ事ハ誠ニ感激深謝ニ堪エナイ次第デアリマス。

殊ニ民生問題及教育問題ニ対シテ深く御考察下サイマス事ハ歡喜ニ堪エマセン。日本統治ノ桎梏下ヲ脱シ自由平等ノ身ニ還リ台湾ガ光復シ日本ノ為ニ奥地ニ追放サレタ我々モ墳墓ノ地ニ復帰シ祖父ノ靈ヲ祭祀シ慰メルノガ当然ノ理デアリ光復シタ以上ハ我々モ故郷ニ光復スル喜ビ浴スルノガ明々白々ノ理デアラウト思ヒマス。」

して阿里山の青年を国民党寄りにすることが目標とされていた。この例にみられるように、先住民族をさらに吸収する動きが徐々にみられるようになった。ここで示される代用教員とは、高 [2013a: 272] が示す満州から流れてきた日本語と標準北京語をあやつる学生たちが、欠員の穴埋めを果たすべく山地の各村落に赴任した教員であろう。警戒していた先はずでに台湾に地下組織を有していた中国共産党である。呉 [2008a: 70] によれば先住民族の忠誠を国民党と競い合おうと試み、林など先住民族のリーダーらは極度の不安定な時局で「自己を保ち自衛する」ため接触した。先住民族のリーダーらが中国共産党の懐に飛び込まなくても、この忠誠の遅れは疑心暗鬼に囚われている国民党の忌みに触れることになった。

事実、1949年1月、中国共産党台湾省工作委員会<sup>6)</sup>が発出した文書に、先住民族に関する「關於高山族工作」（高山族への工作について）、「蓬萊族政策方案」があった。2つの文書は台湾省工委会の台湾高山族工作のための綱領的文書だった。「關於高山族工作」の第4項「我們对高山族的政策」（我々の对高山族政策）には、「高山族の民族自決を促し、各族の間の大団結を強く提起し、自治自衛運動を發展させ、民族解放を完成させる」ことが基本方針として記されている。<sup>7)</sup>ここから先住民族を動員して台湾内部に国民党統治に対抗する政治勢力を生み出そうとする動きが存在していたことがわかる。

そうしたなか、台湾省参議会では戦後再開されたキリスト教布教が、先住民族を教化する点で大きな益があり、かつ赤色思想を食い止めることが可能であるという議員からの提案も通過している [台湾省諮議会 2001: 81]。これが伏線となり後述する山での大規模な布教へと結びつくともいえる。

1949年5月20日には戒厳令が敷かれ、政府の効果的なコントロールのもと、台湾社会は長期的に安定した状態へと入る [薛ほか 2003: 9-10]。同年末の国民党中央政府の遷台後、政権を立て直すための党の改造等を行ない、蒋介石による指導を強固なものにした [張 2013: 288]。山でもそれまでの空白と表現されていた統治から、山地平地化に代表される急進的な山地行政へと大きく転換した。では1950年代以後、先住民族の社会と文化はどのように変容していったのか、次節でみていくことにする。

### 3. 1950年代からの先住民族社会の変容

1949年末の国民党中央政府の台湾移転後、政権は山地が中国共産党の根拠地建設を狙う地域とみて警戒を強めていく。省主席兼保安司令呉国楨による「告山地同胞書（山地同胞に告げる書、1950年3月8日）」にある「山地は広いが人口は少なく隙間の地域が非常に多い。そし

6) 略称は台湾省工委会。中国共産党の台湾における地下組織である。 [許雪姬 2004: 1107]

7) 「關於高山族工作（中共有關「二二八」之内部文件）」国家安全局館藏二二八事件資料，機関 228-E，宗號 3-(12)，中央研究院近代史研究所檔案館所藏。

て奸匪はこの機に乗じてこの隙間を利用して、山地に紛れ込む」という一節がそれを如実に物語る。そして、「あなたたちは中華民国国民なので、奸匪を一掃する責務がある」とも呼びかけていた [中央日報 1950 年 3 月 7 日 : 4]。実際、張 [2013: 296] が引用する資料「兼台湾省保安司令呉国楨上呈總統報告 (台湾省保安指令呉国楨による總統蔣介石への上申書) (1950 年 11 月 10 日)」によれば、中国共産党は山地に地下武装組織を建設しており、呉国楨から蔣介石に上げた報告には、台中方面、角板方面、阿里山方面それぞれに組織が形成されており、台湾省の政治に与える脅威は甚大である、という危機感が記されていた。さらに翌 51 年 4 月には国防部政治部が「山区匪謀」を捕まえたと発表している [中央日報 1951 年 4 月 1 日 : 1]。

また、若林 [2008a: 78] が示すように国民党政権に台湾内部から挑戦する力が微弱だった 1950-60 年代は、国民党政権による上からの台湾社会に対する一大「中国化」運動の時期となった。「中国化」、すなわち「中国人になるために学ぶ」(Learning to be Chinese) ということは、遷占者集団のエリートが主流文化として提示する文化に同化することを意味した。戦後初期の山地行政が十分に機能しなかったことと比べ、以下にみるように山地も例外に漏れず「山地平地化」という一大「中国化」が展開され、松岡 [2011: 26] が「地方化」と表現するように、先住民族社会が段階的に一元的統治・行政体系下へと組み込まれていった。

### 3.1 山地平地化

「山地平地化」とは、当時の台湾省主席嚴家淦が述べるには、経済文化水準を向上させ、平地同胞 (引用者注: 平野部に住む漢族) と同じとし、数年後には山地・平地間の分け隔てをなくし融合を目指す山地行政の基本方針である [国語日報 1956 年 4 月 18 日 : 4]。孫 [2008: 315-316] によれば、このとき山は山地平地化の方針のもと完全に体制内に組み込まれ、村落社会の瓦解が起きたとしている。

では、具体的にはどのように進められたのか。松岡 [2012] が山地行政史の枠組みのなかで若干触れてはいるが、本稿では改めて整理し政策遂行とその実態を示す。1951 年「山地三大運動」(山地人民の生活改善, 定着耕作, 育苗造林) が、山地各郷村であまねく始まった [郭 1975: 98]。とくに「山地人民生活改進運動辦法」(山地人民生活改善運動規則, 1951 年公布) により六大目標が掲げられた。<sup>8)</sup> 村長, 村幹事が指導監督の責任者となり、以下国民学校

- 8) 1, 言語: 国語を主とし, 山地方言を補助とし, 従事者, 学校, 社会の三方面から, 全体の協調のもと推進する。
- 2, 衣服: 簡単質素な服飾, きちんと清潔を保つことを唱導し, 寒暖の差に注意する。裸体, 半裸体といったよくない習慣をやめさせる。
- 3, 飲食: 栄養, 衛生に注意を払い, 椀, はし, 食卓, いすを用いる。手掴みの食事や酒暴飲の禁止。
- 4, 居住: 地元で作った材料で, 家屋の改造, 寝室を分けて, キッチン, カマド, トイレ, 浴室を置き, 下水道やごみなどをきれいにして, 環境衛生を維持する。
- 5, 日常生活: 生活の規律化を勧告指導し, 時間や経済観念を教え込む。勤労や備蓄を唱導し, 生産を奨励し副業を指導する。
- 6, 風俗習慣: 迷信の除去, 祭祀の改善, 占いによる病気治療の厳禁, 屋内埋葬の禁止, 婚姻の陋習の禁止, 早婚の禁止 [郭 1975: 98]。

校長，教員，派出所警官，衛生室保健員，助産婦なども指導監督者となって実施された。点数をつけて評価し，各家については衣服 10 点，飲食 15 点，居住 20 点，経済 40 点，教育 15 点，計 100 点と点をつけ，村落単位については，村全体の改善点 20 点（公衆トイレ，ごみ収集，飲料水，貯水槽の設置，道路補修，公共墓地や火葬場の設置，酒の自粛，迷信の打破，国定祝日や春節，端午節，中秋節を祝う，新式の結婚儀式の導入など）に，上の各家庭の点数を 80 点として加点した。そして 90 点以上で甲，80 点以上 90 点未満で乙，70 点以上 80 点未満で丙，60 点以上 70 点未満で丁，そして 60 点未満は不合格とされた（第 14 条，第 15 条）。毎年末の検査後は，台湾省政府民政庁が等級の標識を配り，各家の入り口に掲げ，翌年の検査の参考に供すとされた（第 18 条）[台湾省政府令 1955: 447-448]。

さらに優秀な成績をおさめた郷村には褒章が与えられた。「四十六年推行山地人民生活改進運動應發獎金一覽表」（1957 年山地人民生活改善運動獎金一覽表）のとおり等級別の格付けがなされ，<sup>9)</sup>「甲」の郷は省政府から獎金 300 元，優等村は 200 元，「甲」の村は台湾省政府民政庁から 200 元が与えられた [台湾省台中県政府 1958]。また，各家庭についていえば，検査の結果に基づき各村の上位 3 戸が「模範戸」とされ，「模範家庭」という金属でできた札が家の門に掲げられた。そして「模範戸」に住む者は，台湾省による観光団に率いられ台北で表彰式に参列し，各工場，機関，学校観光，各県の模範村を見学し，近代的知識を広げつつ互に見習うこととされた [台湾省政府民政庁 1954: 78-79]。

上についてより実態を理解するため，若干長くなるが以下に当事者である莫那能（モーナノン，1956 年生，台東県達仁郷パイワン族，文学作家）の記録を引用する。

山地平地化の施策として，政府機関が半年に 1 回人を部落に遣わし，住居の改善状況を見て回ることがあげられる。県政府の人が郷役所の人の付添いのもと，1 戸ずつ検査し，検査が終わると特優，優良，優，不良，劣，と 5 つの等級に分けられた紙を貼っていった。評価基準がよく分からなかったが，私たちの家はだいたい不良だった。おそらく住居の安全，衛生，電化の程度などの要素が一緒くたにされていたのだろう。不良をとったからといって罰が科されることはなかったが，ある種の雰囲気，つまり不良，劣となることは他の人より落伍し貧しくて見下げたという感覚があった。よって，多くの家庭ではまぎれもなくお金がないのだが，分割で電気製品を買いに行った。誰かが検査に来ると聞きつければ，虫に食われた柱に土を急いで塗り，油を買って塗り，みな必死で忙しくなった。[莫那能 2010: 73]

9) 甲等郷：五峰，烏來郷。

優等村：大陰，竹林，花園，桃山，忠治，信賢，中正，民族，南勢，明德，安坡，佳民村。

甲等村：烏來，博愛，嘉樂，新生，三光，民生，牡丹，武塔，（延平郷）紅葉村。

検査の者が巡回に来ることで、為政者の権威が人々に理解されていったのである。この光景は戦後すぐの頃、人々が新たな統治者に対応できず旧宗主国の権威にすら従う様子〔陳武台 1981: 200-201〕とは大きく異なるものである。

結果、社会の変貌は如実に表れた。そのことは日本統治時代に山間部で警察官を務め、1972年に元の勤務地である台東の大武を再訪したある日本人が、

蕃社には電灯が付き、テレビも「電氷箱」という電気冷蔵庫も普及し、道路は舗装されて自動車がこの蕃社にも出入りできる。家は小型ながらも鉄筋コンクリート造りで、これを何語か知らないが「スラブ」といって、だれもがスラブの家を建てることを目標に働いている。〔桜栄 1979: 240-243〕

と記録するように、伝統的社会からの変容がうかがえる。他にもパイワン族では祖先から伝わった彫刻が大量に焼却され、タオ族では伝統の家屋がブルドーザーで壊されたという証言もある〔柳本 2004: 345〕。同時代的に生きた孫〔2008: 315〕は、周囲の環境が変わり、歌も踊りも儀式も行なわれなくなり、プユマの言葉も使われなくなり、先住民族の老人が懐古と悲愴な面持ちに暮れる様子に触れている。また、ツォウのパイツ・ムクナナ〔2004: 307-308〕も、文学作品という形で、「文明の物質生活をツォウも学ばなければならない」というスローガンのもと、人々がコンクリートで塗り固めた家に建て替え、審査でよい点が取れるよう競うように家庭用品を買いそろえている様子を描いており、参考になる。

### 3.2 国語教育

戦後初期の頃の山では、上述のとおり学校運営に支障があった。ところが1950年代以後は、「戡乱建国教育実施綱要」（反乱鎮定建国教育実施綱要）（1950年6月教育部公布）にあるように、教育についてもすべて国家は共産党の反乱鎮圧に一切が動員される状態におかれるという、大きな方向性が示される〔台湾省政府教育庁 1955: 243〕。そしてさまざまなイデオロギー色を含む教育に関する令が発せられ、さらに教員や学校施設、教材等に改善がみられるなど、為政者による山での統治の強化は学校でも展開された。その中心的課題のひとつに、国語普及の推進と先住民族言語の使用禁止があった。

この大きな方向が示された理由を理解するためには、劉〔2011〕の研究が参考になる。劉〔2011: 289-291〕は国共内戦の敗北要因のひとつに、蔣介石は「教育の失敗」を掲げ、そのうえで「三民主義教育」強化の方針を定めたことがあったとしている。劉は、蔣による1949年6月から1952年10月までの4年間の講演から、国民党が大陸での敗北の原因をどのように総括したかを分析している。そして劉は1951年9月「教育與革命建国的關係」（教育と革命建国との関係性）という蔣の演説「我々の最大の失敗とは教育と文化だ。我々は長年にわたり

教育を失敗したため、このたびの全面的な敗北の主要因を作り出したのだ」を引き、蔣によるこのような検討が後の台湾における教育政策と発展に大きく影響を与えているとしている。実際、「中央改造委員会第二百四十一次会议 1951年11月15日」において議案に出された「行政院四十一年度施政計画綱要」に「反共抗ソの既定国策を進めるために台湾を積極的に建設し、大陸反攻を中心とする任務を準備する」とある。その下には、「国民教育を拡充し就学率を高める」ことが記されている〔中央委員会秘書処 1952: 299〕。しかも、当時の教育部長（教育を所管する閣僚）程天放は、「民族精神教育」という名のイデオロギー教育は当時の「国民学校」（6年制義務教育課程）に重点を置くと述べている〔程 1954: 226〕。上に示される民族精神教育とは、蔡〔2006: 38-39〕によれば国語・常識・歴史・公民・地理などの科目で、蔣の国家指導者の座を強固にすることと、反共抗ソの二大項目を主軸とするものであった。

イデオロギー色の濃い教育が推進されると同時に、台湾省政府教育庁から、国民学校の授業では台湾語、先住民族言語等の「方言」の使用を禁止する、国語の程度の低い教員は任用しないことが通知され（1951年7月）、さらに翌52年11月には「課程標準」（学習指導要領に相当）が修正され、またもや「方言」の使用を避けることが改めて示されている〔森田 2013a: 90〕。この時期、各地の師範学校に先住民族出身者枠を設けて教員養成にあたるなど国語力のある新任教員確保に努めていた。現職教員については補習を受けさせ、国語力が勤務評価に影響を与えるという圧力をかけて国語を操る教員を確保した〔森田 2013a: 91-92〕。

そして「方言」を使うと罰則を科すという手法もとられつつ国語教育が展開された。ここでいくつか実態を示すと、孫〔2008: 317-319〕が自身のプユマ族の経験から述べるように、1950年以降に生まれた者の多くはプユマ語で複雑な話ができず、歴史上の故事来歴についての認識も表面的なものしかもたなくなったとし、先住民族言語文化の維持、継承が困難になったと指摘する。唐〔2008: 106-107〕によるアミ族へのインタビュー調査（於花蓮県、2007-08年）では、人々は共通の記憶として、アミ族の先生はアミ語を話すことはなかった、学校では国語を話さなければならず、もしアミ語を話せば立たされたり怒鳴られたりなど罰せられた、うっかりアミ語を話してしまったとき、クラスメートに告げ口された、などを語るのである。莫那能の地域では、先住民族には何のお金もなく罰金を払えないとの理由で、労働罰が科されたという〔莫那能 2010: 72〕。パイツ・ムクナナの文学作品にも、「母語を話すと、『違反』と書かれた板を一日じゅう首からぶら下げていなくてはならないのです」という一文があり参考になる〔パイツ 2004: 308〕。学校から先住民族言語は消えゆく道を進み、ある阿里山のツォウの老人（1939年生まれ）は、行進しながら「大陸反攻」といった国是の愛国歌を歌わされたと振り返るように〔嘉義県阿里山郷達邦国小 2004: 11-12〕、国語を通じて当時の為政者が示すイデオロギー色の強い教育内容が山でも展開されていった。

### 3.3 キリスト教の布教

1950 年代以後先住民族社会にもたらされた上からの大きな力とは、山地平地化などだけではなかった。大規模にキリスト教が布教されたがゆえに、為政者も山の統治を進めるためキリスト教をうまく活用することになる。

戦後、山ではキリスト教布教が再開された。そして先住民族の多くが信徒になったが、坂本 [1988: 276] は 2 つの理由を掲げている。1 つ目は経済的理由に基づくものである。欧米のキリスト教国家は台湾に多数の宣教師を派遣し、物質的利益を教会が享受できるようにした点である。2 つ目は精神的理由に基づくものである。日本の統治から離れた先住民族らは、日本による教育・行政による精神的薫陶の支えを一時喪失してとって代わるものを見出せなかった。ちょうどそのときキリスト教が精神的支えの空白をうめたのである。

2 つ目の理由は次のいくつかの資料からその内実が明らかになる。田光明 (1927 年生まれ) による口述 (1949 年に初の布教の地として南投を訪れた頃の様子) によれば、人々は戦後になっても神社を参拝していたが、彼らは日本人が戦争で負けたことで、拝んでいたものに対してなぜ拝んでいるかが分からなくなり、徐々に伝道の福音へ接触するようになっていったという [田 2003: 32]。魏 [1984: 404] の調査 (1979-81 年、於台湾桃園県復興郷) によれば、65 歳の男性 (調査当時) は、日本人が帰った後、天主教の伝道師のイギリス人がいち早く到来し、新しい人生が始まるときに、心の拠り所として、新しい天主様と語り合ってみないか、と誘いを受け入信した。71 歳の女性 (調査当時) は、天皇陛下は天子様だったが戦争が終わり山から消えてしまったが、美しい光を放つ基督教の天子様が到来し、イギリスの人が手を組んで頭を下げるだけでよい、ただ日曜日にキリストと話してみなさい、と声をかけられた。神社跡がキリスト教施設に転用されたこともあり [西村 2010: 3]、人々は信仰の対象、そして精神的拠り所を徐々に転化させていったのである。

そのとき布教者のとった方法とは、山の人々により接近するため、先住民族の言語や日本語を積極的に用いることだった。先住民族への布教拠点として玉山神学院 (花蓮) が建設されたが、共通語は北京語としつつもそれぞれの民族が自らの言葉を尊重して学び、そこに民族の魂や先住民族のアイデンティティを見出すという教育方針を立てた [楊 2003: 61-62]。また日本統治時代生まれの牧師 (1928 年生まれ) へのインタビュー (2012 年 5 月) では、1960 年代までの山地伝道では日本語こそが先住民族を繋ぐ道具であったと指摘されている [佐藤 2013: 26]。

さらに、キリスト教は病院を建てるなど人心掌握を進めた。ブスン族出身の天主教神父は、宣教師らが住居の改善や農業の生産向上のための耕耘機を購入するなどした。また天主教と長老派はカテキズム (キリスト教理) を教える現地人宣教師養成のための学校を設立し、小学校或いは中学校卒業の者を入学させ費用は無償とし、卒業後はよい職業につけるよう手配した。

加えて病院を創設し貧しい者の治療費を徴収しなかった。結果、山地の人々の宗教心は極めて熱心となり、村人が警察の話より宣教師の話をよく聴くので警察は怨みを抱いた、と伝えられていた [坂本 1988: 277-278]。

他に「山地の生活は、単調で苦しく乾燥しており、よって山胞は基督教会の歌を頗る喜んで歌う。若い信者はとても楽しみ、信徒は日に日に増え、キリスト教は山地で盛んになっている。また、流行の歌は、目下、山地では滞りなく通じるが、学校で教えた、または民教班<sup>10</sup>で教えた歌を歌うものは甚だ少ない」という証言 [許秀明 1960: 73] のように、学校教育を阻害する存在になっていた。

為政者はこうした先住民族の人心をうまく掴む宗教関係者の存在に目をつけ、山の統治を押し進めていくのである。屏東県警察局からの報告（1953年）（国史館所蔵台湾省警務処（行政院に隷属する治安情報機関）資料）を閲覧した森田 [2013b: 5] から引用すれば、

光復以来基督教会はあまねく人を遣わし山に入り各郷村で伝道を行い、すでに獲得した信徒の数も多く、教会を建設して礼拝を行っている。山地の良くない風俗習慣を取り除き、過去の迷信や悪い習慣を打ち破ることに、確かに助けとなっている…反対に、信者は病気になると祈祷を神にささげるだけで医者に診てもらわないとか、選挙のときに礼拝集会を使ってキリスト教徒出身の候補者の選挙宣伝や、非キリスト教徒を排斥し無意識のうちに派閥間で争うなど、いつも弊害がおきて、治安秩序に影響を与えている。甚だしくは信仰の自由が不幸にして以上の状況を生み出し、宗教の真理を失い、社会に良くない現象をもたらし、山地治安に影響を与えている。

と、教会の布教活動を完全に抑えつけることはせず、揺らぎをもたせつつ山地の統治に利用したことが分かる。さらに台北の台湾省警務処もキリスト教会の利点（政府が推進する禁煙禁酒の推進に協力し、先住民族の粗野で屈強な性格が、一遍に穏やかになったこと）や、弊害点（教会間の派閥が先住民族の行動に影響を及ぼしていること、礼拝堂建設の寄付を募る行為が人々の負担を重くしていること、教会の活動が時として国語推進他政令の遂行を妨げていること、布教者は玉石混交で少なからず影響を与えていること）を十分把握していた。そこで入山する布教者には事前に地元の治安指揮所に許可を求めるよう指導し、布教では日本語を禁じ、主として国語を使わせ、台湾語および先住民族言語を補足的な説明に限定させて、山地の統治に当たっていた [台湾省警務処 1953: 150-152]。

結果、温存されたキリスト教布教は先住民族社会の変貌をもたらした。孫 [2008: 315-317]

10) 日本統治時代に教育を受け学齢期を過ぎ、国語を学んだことがない30～40歳に達していた者は、民教班と呼ばれる夜間補習クラスに出席していた [森田 2013a: 93]。

の指摘を整理すると、山地平地化による社会構造の瓦解により社会が抛り所にしてきた宗教信仰も失われたところに、新たに到来した宗教が人々を争奪の対象としたことで、アニミズムを信奉していたプユマ族の人々を一神教に帰依させ、固有の宗教信仰を捨てさせていったのである。また布教の当事者である楊 [2005: 16-17] も、人口の多くない山の村に複数教派の教会が建てられたことは、元来ひとつのコミュニティの先住民族集落、ひとつの家庭が信仰によって引き裂かれてしまったと自省の念を込めて述べている。

変貌の具体例を示すと、プユマ族（台東知本）では戦後すぐの頃はかつての方法で収穫祭が行なわれていたが、1950年代以降パラクワン（男子集会所）の禁止と天主教の受容により、収穫祭の担い手が解体され、収穫祭を行なう空間の喪失へとつながった。そしてやはり天主教が食料や衣類を配布することで多くの信者を獲得し、パラクワンとカルマアン（伝統祭祀用の小屋）があった地に知本天主堂が建てられた。彼らの伝統的祭祀のための空間は失われ、教会はパリシなどの伝統的信仰を「邪教」と位置付け禁止し、収穫祭などの集落祭祀が天主教の祝祭としての「収穫祭」に代替され、それが教会で催されていったのである [渡邊 2013: 213-214]。

#### 4. お わ り に

以上の本論部分を整理すると、戦後すぐの頃、為政者は山地統治に消極的で、先住民族の側も新たな政権に対して平野部の人々が「祖国」の官員等を歓迎する様子とは異なり、ただ傍観するという特徴的な戦後過程の差異がみられた。先住民族が自律的な脱植民地化を求めようとする動きも若干みられたが、その空間はすぐ閉ざされ、当時の為政者が「敵」とみなしていた外部勢力、すなわち中国共産党関係者の締め出しをはかる動きがみられた。山地平地化の展開に代表される1950年代以後は、戦後初期と異なり為政者は山を十分に統治すべく、先住民族独自の文化を顧みず家屋や日常生活の変化を求める上からの強い一元的政策を推し進め、彼らの社会が大きく変貌を遂げた。

確かに上からの一大「中国化」が展開された点では、平野部、山間部とも基本的には同じだった。だが先住民族の場合、漢族と比べて圧倒的な人口の少なさ<sup>11)</sup>に加え、漢族の文化に収まらない異質性があったゆえに、伝統的社会は徐々に崩壊していった。

まず山地平地化は、藤井 [2001: 193] によれば漢族文化を中心とするものであり、政府による強制的な推進は漢族文化の「優勢」、「権威」というイメージを先住民族の間に作り出していった。具体的には本論部分でみたように、山地平地化での加点评価の対象には春節、端午節、中秋節といった漢族文化の導入が含まれていたからである。また莫那能 [2010: 43] が振

---

11) 1950年の統計によれば、総人口は約760万人 [南 1971: 27-31]。内、山地に住む先住民族の人口は約9万1千人であった [陳学明 1956: 3]。

り返るように、伝統的な祭司は先住民族の村落では一定の社会的地位があったものの、為政者の定義では迷信になるか邪悪の象徴とされ先住民族の価値観を変えていった。学校教育についていえば、莫那能 [2010: 44] が再び指摘するように、そもそも漢族と先住民族との間にはある種の思考、観念のずれが存在した。それは平地の漢族には書に親しむことは崇高だという観念があるが、先住民族には知識人という価値観や、勉強することの大切さという考えはあまりなく、当時ほとんどの先住民族は、学校に通うこととはやむを得ないことだと考えていた点である。価値観の差異の一例を示すと、学校教育で教えられる算数は先住民族が苦手とするところであり、そもそも彼らの歴史において貨幣による売買など生活において尺を量るという数字の概念が存在せず、算数の成績はひどいものだったと振り返っている [莫那能 2010: 43]。

さらに学校教育の中心であった国語教育についていえば、先住民族言語と国語には言語学上の距離があり、先住民族の国語学習には困難があると指摘されていた。平野部の閩南語、客家語は漢語に属し、戦後になり平地の人々が国語を学ぶ際、音、語彙、語順を学び直す必要はあまりなかった。ところが先住民族は音、語彙、語順を一から学ばなければならず、当時、先住民族が国語を学ぶことは、外国人が国語を学ぶようなものだ、と表現されていた [森田 2013a: 93-94]。この指摘は戦後世代の先住民族文学作家の創作活動に如実に影響が出ている。トパス・タナピマ (田雅各、ブヌン族、1960年南投県信義郷生まれ) の国語 (中国語) は形容詞が動詞に後置される特徴をもつ。なぜならトパスはブヌン語で思考し、学校教育のなかで獲得した第二の言語である国語で創作するからである。事実トパス自身は何度も書き直しを必要とすると言語るのである [下村 1994: 268-270]。

そこに加えて本論部分でみた基督教の布教についていえば、宗派を問わず人々の病が重くなると治癒の祈願にたずさわり祈祷文を作成し、なかには「基督教を信ずればがんも治る」と信じきっていた熱心な信者さえいた [山路 2011: 159-160]。こうした一例のように、先住民族のもつ宗教が基督教に転化し、彼ら独自の文化の瓦解がさらに進んでしまった。

しかも人々が声を発しようにも、代弁者となりうる高一生や林瑞昌といった社会的リーダー階層が排斥されたことで抑えられた。先住民族当事者の声を発する空間なきまま、その後、若林 [2008b: 300] が指摘するように一定の政治的権利を先住民族にも賦与しつつ、日本統治時代よりも徹底した一元主義的同化主義的文化・教育政策を実行し、土地に関しては保護と開発の間を揺れ動きながら、結局は平地資本の浸透に道を開き、内部植民地主義的状况の深化に手を貸すという展開をみせた。こうした厳しい状況に直面すると、遥々日本から再訪した人物への語りという前提があるものの、人々は植民地期の教育所の教科書を持ち出し、われわれには日本精神がある、と話すなど [桜栄 1979: 242]、植民地期の教育等を通じて内面化した日本という要素が、先住民族らの精神的拠り所となる一面すらみられるに至る。

だが彼ら独自の文化や言語は単に消え失せたのではなかった。森田 [2013b] によれば、山

で大々的に布教されたキリスト教は、聖書や賛美歌をローマ字化した先住民族言語で編み礼拝を行なった。アルファベットの発音記号を読めない場合は、松澤 [1999: 338-341] によるパイワン族地域での調査記録にあるように、人々は日本語のカタカナ表記された先住民族言語の聖書を用いたという。このようにして彼らの言語や文化は教会という空間でようやく維持、継承されていった一面も存在したのである。

## 付 記

本稿は東京大学大学院総合文化研究科学術研究員としての研究活動成果の一部である。

## 引 用 文 献

### 日本語

- 陳 武台. 1981. 「戦後の山地教育再開をめぐる一挿話」 山本良一編集『台湾への架け橋』蓬萊会関西支部, 200-201.
- 張 炎憲. 2013. 「白色テロと高一生」 下村作次郎・孫大川・林清財・笠原政治編『台湾原住民族の音楽と文化』草風館, 283-304.
- 魏 榮吉. 1984. 「中国少数民族と近代化—台湾『高砂族』の場合」 田中正美先生退官記念論集刊行会編『中国近現代史の諸問題—田中正美先生退官記念論集』図書刊行会, 387-416.
- 呉 叡人 (森田健嗣訳). 2008a. 「台湾原住民自治主義イデオロギーの根源—ロシン・ワタン (日野三郎, 林瑞昌) (1899-1954), ウォグ・ヤタウユガナ (矢多一生, 高一生) (1908-1954) の政治思想に関する初歩的考察」『高一生 (矢多一生) 研究』9・10: 45-70.
- 范 燕秋 (中村平訳). 2008. 「ロシン・ワタン (1899-1954)」『高一生 (矢多一生) 研究』9・10: 39-41.
- 浦 忠成 (魚住悦子訳). 2005. 「ウォグ・ヤタウユガナ 高一生 矢多一生 (1908-1954) —ツォウ族を現代化に導いた第一人者」『高一生 (矢多一生) 研究』創刊号: 20-24.
- 何 義麟. 2011. 「台湾二・二八事件」和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真編集委員『岩波講座東アジア近現代史第7巻—アジア諸戦争の時代 1945-1960年』岩波書店, 208-209.
- 加藤邦彦. 1979. 『一視同仁の果て—台湾人元軍属の境遇』勁草書房.
- 川路祥代. 2008. 「信夫先生のこと」高玉宗哲『日治時期鄒族的「蕃童教育」—以達邦教育所為例』台南, 南台科技大学應用日語系碩士論文, 132-138.
- 黄 智慧 (鈴木洋平・森田健嗣訳). 2012. 「台湾における日本観の交錯—族群と歴史の複雑性の視角から」法政大学国際日本学研究所編『地域発展のための日本研究—中国, 東アジアにおける人文交流を中心に』法政大学国際日本学研究中心, 43-70.
- 高 英傑 (アバイ・ヤタウユガナ) (下村作次郎訳). 2013a. 「随筆 ケユパナの思い出—私の父, 高一生」下村作次郎・孫大川・林清財・笠原政治編『台湾原住民族の音楽と文化』草風館, 247-282.
- \_\_\_\_\_. 2013b. 「高一生の歌と手紙—土地, 民族, 愛情」下村作次郎・孫大川・林清財・笠原政治編『台湾原住民族の音楽と文化』草風館, 333-353.
- 松田吉郎. 2000. 「阿里山ツォウ族の戦前・戦後—イウスム・ムキナナ氏のライフヒストリーを中心に」『兵庫教育大学研究紀要第2分冊—言語系教育, 社会系教育, 芸術系教育』20, 79-93.
- 松岡 格. 2011. 「台湾原住民社会地方化の日本統治時代における展開」『日本台湾学会報』13: 25-49.

- \_\_\_\_\_. 2012. 『台湾原住民社会の地方化—マイノリティの20世紀』研文出版.
- 松澤員子. 1999. 「日本の台湾支配と原住民の日本語教育—パイワン社会におけるカタカナの受容」 栗本英世・井野瀬久美恵編『植民地経験—人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院, 326-345.
- 南亮三郎編. 1971. 『台湾の人口と経済』アジア経済研究所.
- 宮村堅弥. 1982. 「高砂族の真心」台湾協会編『台湾引揚史—昭和二十年終戦記録』財団法人台湾協会, 175-176.
- 森田健嗣. 2013a. 「戦後台湾山地社会における言語政策の展開—日本語の排除から先住民族言語の排除へ」『アジア経済』54(2): 79-105.
- \_\_\_\_\_. 2013b. 「戦後台湾山地社会における原住民族言語の維持と継承—キリスト教会が果たした役割に注目して」『日本台湾学会報』15: 1-19.
- \_\_\_\_\_. 2014. 「戦後初期台湾における言語政策研究再考—代行政された脱植民地化の視角から」『日本台湾学会報』16: 107-125.
- 中生勝美. 2003. 「台湾ツォウ族・高一生の民族自治区構想—ソビエト連邦の民族政策と東アジアへの影響」岡洋樹・高倉浩樹・上野稔弘編『東北アジアにおける民族と政治』東北大学東北アジア研究センター, 47-63.
- 中村 平. 2007. 「『困難な私たち』への遡行—接触領域における暴力の記憶の民族誌記述」『コンタクト・ゾーン Contact zone』1: 143-160.
- 中村ふじゑ. 2000. 『オビンの伝言—タイヤルの森をゆるがせた台湾・霧社事件』梨の木舎.
- 西村一之. 2010. 「台湾東部における『歴史』の構築—『祠』から『神社』へ」『日本女子大学紀要人間社会学部』21: 1-16.
- 西盛佳美. 1982. 「高砂武装隊」台湾協会編『台湾引揚史—昭和二十年終戦記録』財団法人台湾協会, 251-253.
- 野林厚志. 2003. 「台湾タオのテクノニミーと慣習名の正名化」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』風響社, 583-604.
- パイツ・ムクナナ (松本さち子訳). 2004. 「親愛なるアキイ, どうか怒らないでください」孫大川・楊南郡・サキヌほか『台湾原住民文学選4 海よ山よ 十一民族作品集』草風館, 304-318.
- 蔡 錦堂 (水口拓寿訳). 2006. 「日本統治時代と国民党統治時代に跨って生きた台湾人の日本観」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における「日本」—植民地経験の連続・変貌・利用』風響社, 19-59.
- 坂本 進. 1988. 「台湾山地同胞 (旧台湾高砂族) とキリスト教」『宗教研究』62(3): 269-288.
- 桜栄寿三. 1979. 『蝸牛の鳴く山—高砂族とともに』藤森書店.
- 佐藤貴仁. 2013. 「ある台湾日本語世代の牧師の記憶」『交流』863: 21-29.
- 下村作次郎. 1994. 『文学で読む台湾—支配者・言語・作家たち』田畑書店.
- 孫 大川 (安場淳訳). 2008. 「歴史を生きる 原住民の過去・現在そして未来」『台湾原住民文学選6 晴乞い祭り—散文・短編小説集』草風館, 312-328.
- タンダ・ワタン (菊池一隆解説・訳・註). 1999. 「1950年代台湾白色テロ受難の回想」『近代中国研究彙報』21: 49-83.
- 若林正文. 2008a. 『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会.
- \_\_\_\_\_. 2008b. 「試論 日本植民帝国『脱植民地化』の諸相—戦後日本・東アジア関係史への一視角」黄自進主編『東亜世界中の日本政治社会特徴』台北: 中央研究院人文社会科学研究中心, 277-305.
- 渡邊昌史. 2013. 「台湾原住民族の『土俵』をもつ相撲—伝統文化における本質主義と異種混交性」下村作次郎・孫大川・林清財・笠原政治編『台湾原住民族の音楽と文化』, 草風館, 199-221.
- 山路勝彦. 2011. 『台湾タイヤル族の100年—漂流する伝統, 蛇行する近代, 脱植民地化への道のり』風

- 響社。
- 柳本通彦. 2004. 「解説 <sup>こだま</sup>木霊する <sup>いのち</sup>生命の歌」孫大川・楊南郡・サキヌほか『台湾原住民文学選 4 海よ山よ 十一民族作品集』草風館, 325-355.
- 楊 啓壽. 2003. 『傷ついた葦と共に』日本キリスト教団出版局.
- . 2005. 『台湾基督長老教会の過去・現在・未来—原住民宣教と民主化運動』日本基督教団北海教区アイヌ民族情報センター.
- 台北県海山区三峡鎮大豹原社復帰陳情書. 2008. 「資料」『高一生（矢多一生）研究』9・10: 42-44.

## 中国語

- 陳 中禹. 2008. 「戦後初期台湾『山地行政』的成立與推動」黄翔瑜執行編輯『戦後檔案與歷史研究—第九屆中華民國史專題論文集』台北：国史館, 289-332.
- 陳 学明. 1956. 『台湾高山族之研究』台北：新世紀出版.
- 程 天放講・教育部教育資料研究室輯. 1954. 『程部長天放五年来言論選集』台北：教育部教育資料研究室.
- 郭 秀岩. 1975. 「山地行政與山地政策」『中央研究院民族学研究所集刊』40: 97-106.
- 何 鳳嬌編. 2008. 『戦後台湾政治案件 湯守仁案史料彙編（二）』台北：国史館・文建會.
- 洪 敏麟. 1971. 「綜觀台湾山地社会結構與文化演變之軌跡」『台湾文献』22(3): 26-54.
- 紀念台湾省第一屆原住民省議員林公瑞昌一樂信・瓦旦—銅像落成揭幕典禮委員會編. 1993. 『追思泰雅族英靈—前省議員樂信・瓦旦（林瑞昌）』桃園：紀念台湾省第一屆原住民省議員林公瑞昌一樂信・瓦旦—銅像落成揭幕典禮委員會.
- 嘉義県阿里山郷達邦国小. 2004. 『嘉義県阿里山郷達邦国小—創校百週年校慶校史初稿』嘉義：嘉義県阿里山郷達邦国小.
- 林 佳陵. 2007. 「台湾戦後初期の原住民政策與法令」台湾法律史学会・王泰升・劉恆奴主編『以台湾為主体的法律史研究』台北：元照出版, 163-196.
- 林 金田訪談. 2009. 「『山大王』山胞行政局局長（郭秀岩）」黄宏森・林明洲編輯『台湾省政人物口述訪談』南投：国史館台湾文献館, 107-175.
- 林 元輝編註. 2011. 『二二八事件台湾本地新聞史料彙編』台北：財団法人二二八事件紀念基金會・国立政治大学図書館.
- 劉 維開. 2011. 「第十章 檢討總結」蔣永敬・劉維開編『蒋介石與国共和戰』台北：台湾商務印書館, 274-309.
- 莫那能口述, 劉孟宜錄音整理, 呂正惠編輯校訂. 2010. 『一個台湾原住民的經歷』台北：人間出版社.
- 孫 大川. 1991. 『久久酒一次』台北：張老師出版社.
- 台湾省諮議會編著. 2001. 『台湾省參議會, 臨時省議會暨省議會時期史料彙編計畫—郭国基先生史料彙編（上）』台中：台湾省諮議會.
- 台湾省警務處編. 1953. 『台湾省山地警政要覽』台北：台湾省警務處.
- 台湾省政府教育庁. 1955. 『十年来的台湾教育』台北：台湾書店.
- 台湾省政府民政庁編. 1954. 『進歩中的本省山地』台北：台湾省政府民政庁.
- 唐 瑋信. 2008. 「近代国家体制下学校教育对台東和平部落—阿美族人語言使用變遷之研究（1895-2007）」花蓮：国立花蓮教育大学郷土文化学系碩士論文.
- 藤井志津枝. 2001. 『台湾原住民史—政策篇（三）』南投：台湾省文献委員會.
- 田 明賢. 2003. 「布農族宣教勇者田光明牧師宣教史録」花蓮：玉山神学院研究所道学碩士論文.
- 吳 叡人. 2008b. 「台湾高山族殺人事件—高一生, 湯守仁, 林瑞昌事件之政治史の初歩重建」許雪姬主編『二二八事件 60 週年紀念論文集』台北：台北市政府文化局・台北二二八紀念館, 325-363.

- \_\_\_\_\_. 2009. 「台湾原住民自主主義の意識型態根源—樂信·瓦旦與吾雍·雅達烏猶卡那政治思想初探」  
洪麗完主編『國家與原住民—亞太地區族群歷史研究』台北：中央研究院台灣史研究所，193-229.
- 許 秀明. 1960. 『山地社会』台北：著者出版.
- 許 雪姬總策畫. 2004. 『台灣歷史辭典』台北：遠流出版社.
- 薛 化元·陳 翠蓮·吳 鯤魯·李 福鐘·楊 秀菁. 2003. 『戰後台灣人權史』台北：國家人權紀念館  
籌備處.
- 中央研究院近代史研究所編. 1993. 『二二八事件資料選輯（三）』台北：中央研究院近代史研究所.
- 中央委員會秘書處編. 1952. 『中國國民黨中央改造委員會會議決議案彙編』台北：中央委員會秘書處.

#### 一次資料

- 國家安全局館藏二二八事件資料「關於高山族工作（中共有關「二二八」之內部文件）」機關 228-E，宗號  
3-(12)，中央研究院近代史研究所檔案館所藏.
- 台灣省台中縣政府「改進山地人民生活卷」1958年4月30日 台灣省政府民政行政代電 事由：為四十六山  
地人民生活改進鄉村獎金業經核定應事先填妥領據于頒獎典禮時領取希軫飭遵照。受文者：台中縣政府，  
（目錄統一編號 412 案卷編號 024）國史館所藏.
- 台灣省政府令「台灣省山地人民生活改進運動辦法」『台灣省政府公報』1955年夏（41）：446-448.

#### 新聞資料

- 中央日報. 1950年3月7日，4. 「清查山地防匪潛伏 吳主席請山胞合作」
- \_\_\_\_\_. 1951年4月1日，1. 「破獲朱毛匪幫偽台灣省蓬萊族解放委員會經過」
- 國語日報. 1956年4月18日，4.